

確実な道

佐藤 一枝

「患難をこえることができた」そう思ったとたん、緊張が解けて涙があとからあとからとめどなく流れて止まらなかつた。戦後、引揚第二船で父がひよっこり帰還したあの日のことは忘れることができない。

栃木県の農林省種畜牧場に疎開していた私と家族は、満州に渡って仕事をしてきた父からの送金が途絶え、どこで生きているのか、それさえ不明になってはや三年、戦後の混乱時代をその日その日をしのぐのがやっとの生活を強いられていた。そんな時に、連絡もなしに突然帰ってきた父は、発疹チフスの病み上がり、歩くのもよろしていた。それでも、この目で父の顔を正面から見た時は、母も兄も、私も妹も、飛び上がって喜んだ。今までの苦勞は瞬時にして消え去ってしまったのである。大黒柱の父が帰って来たのだから。あれから半世紀以上が過ぎた。父もクリスチャンになり大いに主を証して天国へ旅立つて行った。母が、主人が、みな天国へ行ってしまった今、淋しい気持ちをおさえて、日々、確実に自分の足が天国への道をたどっているかどうか、み言葉の光に身と魂を置くことだ

けを考えている。主はご真実なお方である。三人の子供を救って下さり、孫を四人まで救って下さった。しかし、あと二人残っている。

いつか、そんなに遠くなくこの子供たちも救いに入れて下さるに違いない。そうしたら私は慕わしい天国へ一日も早く帰りたいのか、患難の多い地上をのがれたいのか……。

主の前には何一つ隠すことはできない。すべてを知られていることに感謝の祈りが湧いてくる時、きまつて主は細いみ声を聞かせて下さる。

『ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか』『あなたは、わたしに従ってきなさい』
(ヨハネ二一17、22)

天国への確実な道は、やはり険しい道なのだ。そしてみ言葉は蜜より甘いのである。